

# 「雁」の世相史的背景

樋田 満文

森鷗外の小説「雁」は「古い話である。僕は偶然それが明治十三年の出来事だと云ふことを記憶してゐる。……」と書き出されてゐる。「雁」が雑誌『昂』<sup>（おぼろ）</sup>に連載されたのは明治四十四年九月号から大正二年五月号までで、最後の貳拾貳から貳拾肆までの三章分だけ、大正四年五月に靱山書店から単行本として刊行される際に書き下ろされた。

つまり、鷗外が陸軍省医務局長だった五十四歳の年に、東京大学医学部本科四年生だった十九歳の年のことを書き上げた「古い話」なのである。したがって、明治十三年という小説のなかの時点と、明治四十四年以降の執筆の時点は、作中でしばしば交錯する。しかし時代設定が「明治十三年の出来事」と明記されている以上、読者もそのことを意識して読まないわけにはいかない。

すぐれた小説はさまざまな読み方が可能である。「雁」にして、たとえ「一般的にはまだまだ正しい意味での自我の確立などあり得なかった時代の、極めて市井的な一女性の自我の目ざめやその挫折」（戸川良子）を描いたとされ、また「偶然によって人生の岐路が定められる不可知の世界の一端をのぞかせている」（長谷川泉）

ともいわれる。そうしたテーマの追求をすすめる上で、明治十三年という時代設定をさまざまな視点から眺めてみることは必要であろう。いま「雁」の世相史的背景を考えてみようとするのも、その一つの試みに他ならない。

「雁」が小説である以上、鷗外自身の青春期を描いているとはいえ、すべてが事実ではなく、そこにフィクションが加わっていることは明らかである。モデルについても、高利貸末造は医学士専門の金貸岡田元助、末造に囲われる妾お玉は鷗外の隠し妻だった児玉せき、お玉が思いを寄せる医科大学生岡田は鷗外の学友だった緒方収二郎など実在の人々が擬せられているが、もちろん「雁」の登場人物と同一ではあり得ない。

しかし、たとえフィクションとはいえ、明治十三年に時代を設定したからには、鷗外が世相史的背景にも心を配りながら筆を執ったのは当然のことであろう。たとえば、末造がいつも吸う煙草について「金天狗の燃えさしを撮<sup>（と）</sup>んでゐた末造の手に、力一ぱいしがみ附いた」（拾貳）とか、「末造は金天狗に火を附けた」（貳拾壹）といっ

た記述がなされているが、この「金天狗」は岩谷商会の天狗煙草の一つであった。

鹿児島県の川内で醸造業と質商を営んでいた岩谷松平は、明治十一年に東京銀座で呉服店を開き、薩摩がすり上布などを販売したが、外人の吸う紙巻煙草に目をつけ、国産の口付き紙巻煙草を売り出した。宇賀田為吉著『タバコの歴史』によれば、岩谷の工場が青山にできたのは明治十二年から十三年にかけてとされているから、末造は発売されたばかりの天狗煙草を吸っていたわけである。

また、お玉の妾宅へ印半纏を裏返しに來たやくぎ風の男がゆすりにきたので、こわくなったお玉は「その頃通用してゐた骨牌かたのやうな形の青い五十銭札を二枚」(拾遺)渡した。男は満足して「半助でも二枚ありやあ結構だ」といって帰ってゆく。一円の「円助」とともに、「半助」は五十銭の俗称であった。

明治初年に通用していた太政官札、民部省札、大蔵省兌換証券、開拓使兌換証券などの紙幣は、大蔵省編『明治大正財政史』第十三卷(通貨)によると、明治四年十二月から政府発行の新紙幣に切りかえられている。百円、五十円、十円、五円、二円、一円、五十銭、二十銭、十銭の九種で、明治八、九年にはほとんど新紙幣だけになった。「その頃通用してゐた」青色の五十銭札は、この新紙幣の「半助」である。

しかし「雁」の年である明治十三年の二月には、それまでの新紙幣に代わって、十円、五円、一円の改造紙幣を発行すること、五十銭以下の紙幣は銀貨、銅貨と改めることが布告された。その発行は十四年二月からの予定であったから、「雁」の五十銭札は最末期のそれだったことになる。ただし、実際は銀貨、銅貨の鑄造が予定通

り進まなかったため、十五年十二月から五十銭、二十銭の改造紙幣が作られて新紙幣と交換され、三十二年の紙幣整理まで使われた。

以上は「雁」の記述が、世相史的背景を正確にふまえているケースの一、二例にすぎない。こうしたディテールが、「雁」全体のリアリティーを確かなものにして、ことは明らかであろう。ただ、次のような例外ともいふべき事例がないわけではない。

実業家という触れ込みの末造が、上野の料亭松源でお玉とはじめて会ったとき、塀外に声色屋が来て「へい、さやうなら成田屋の河内山と音羽屋の直侍を一つ、最初河内山」(審)という。

河内山と直侍が登場する河竹黙阿弥の芝居は、松林伯円の講談「天保六花撰」に材を取った「雲上野三衣策前」四幕が最初で、明治七年十月の河原崎座で初演されている。河竹繁俊著『河竹黙阿弥』の著作解題によれば、この時の河内山宗俊は九代目市川團十郎、片岡直次郎は四代目関三郎であった。この脚本を改作した「天衣紛てんいふん上野初花」七幕は、明治十四年三月に新富座で初演されたが、河内山は同じ団十郎(成田屋)で、直次郎は五代目尾上菊五郎(音羽屋)が演じている。

つまり、「雁」の声色屋が、「成田屋の河内山」というのは問題がない。しかし「音羽屋の直侍」の方は、わずかな時間差ながら年代が食い違うのである。これはおそらく鷗外が自らの記憶に頼りすぎて、考証を怠った結果であろう。しかし、これをミスと見るより、事実物語と見なされるようになさざるまな工夫がこらしてある「雁」も、事実そのものではなく、やはり本質的にはフィクションに他ならないことを示す一証と考えるべきではなかるうか。

しかし、世相史的背景を考えると、なにも些末主義に類する詮索が本意ではない。鷗外が「雁」を書くに当たって「明治十三年の出来事」と明記し、その時代にふさわしい舞台を設けるのに意を用いた点をまず確認しておくことが必要であろう。明治十三年という時代を意識することなく、現代の感覚からのみ「雁」を論ずることは、作者の意図に反するばかりでなく、作品の理解にマイナスとなるのではないかと考えるからである。

そうした点から、明治十三年という時代に、洋行する医科大学生と高利貸の妾の結びつきが、世間からどのような関係として見られていたかという点、またその結びつきを偶然にもたらし、また偶然のように実らせなかつたきっかけが、岡田と末造の散歩だったことの意味を、世相史的背景のなかでとりあげてみたい。

大学鉄門前の下宿に住む岡田の散歩は、無縁坂をおりて不忍池の北側を回って上野の山内をぶらつき、広小路、池の端仲町を通って帰るコースが一つ。もう一つは、大学を抜けて赤門へ出、本郷通りから神田明神、眼鏡橋、柳原の片側町を歩いて御成道に戻るコースであった。

お玉を無縁坂の妾宅に囲った末造が、女房のお常と喧嘩してはつきき歩いた時には、柳原から淡路町、神保町を通って今川小路まで足をのびし、九段下の小鳥屋で紅雀を買う。この紅雀が「凶らずもお玉と岡田とが詞を交す媒」となった」（拾捌）のである。

考えてみると「雁」の人間関係の重要な「媒」はすべて散歩がもたらしたものであった。明治十三年という時点ではこの散歩がまだきわめて新奇な習俗であったという事実を、現代の読者の多くは意

識せずに読んでいるにちがいない。しかし明治初期には「運動」「遊歩」なども呼ばれた散歩は、実は西洋から入ってきた風習の一つで、明治以前の日本には全く見られないものだったのである。

林若樹が大正十三年に書いたエッセイ「西洋から教はった風俗」は、明治以来輸入された風俗習慣でありながら「今では恰もそれが旧来からの風俗でもある様に同化してしまったもの」として、肉食のようにすぐ気づくものを除き、世人のやや意外に感ずるケースを列挙して論じている。そこでステッキ、半熟玉子、立礼、海水浴などともに、筆頭にとりあげられたのが運動つまり散歩であった。

「食前食後の運動とか、散歩とか、身体の健康を目的としたる徒歩運動といふものは、在来日本には無かつたらしい。神仏に参詣するとか、お百度を踏むとか、其結果からすれば夫れに該当するものはあつたらうが、運動を目的とする運動といふものは無かつたのである。……」江戸時代には、目的地を定めずにぶらぶら歩いたりすれば「犬の川端歩き」略して「犬川」などといわれて軽蔑された。したがって、岡田のように毎日大体決まったコースを散歩するのは、明治十三年という時点で考えれば、始まってからまだせいぜい十年足らずの新奇な風習だったわけである。

岡田が本郷通りから柳原の土手までいって帰ってくる散歩コース、末造が柳原から九段下まで出かけた時の距離をはかってみると、往復で少くとも七キロメートルはある。現在無縁坂近くに住んでいる人が散歩に出かけるとしても、これほど遠出することはまれである。

しかし、明治十七年に参謀本部陸軍部測量局が測量した縮尺五千

分の一の区分図「東京北東部」「東京北部」「東京中部」をひろげて、このコースをたどってみれば、家並みまでわかる精緻な地図だけに、その間の事情のみこめなくてもない。上野の三橋から御成道の両側にかけては人家が密集しているが、柳原の土手付近の秋葉の原はもちろん、眼鏡橋の周辺も広い空地に囲まれている。大邸宅の多い淡路町、神保町、今川小路あたりになると、建て物はかなりまばらにしか見られない。

終戦の前後に東京の焼け野原を歩いた経験の持ち主ならば、岡田や末造と同じくらいの距離を歩くのは何でもなかったことを記憶しているであろう。田舎道と同じで、人家のたてこんでいないところは近く感じるものである。「雁」の時代の距離感覚を、現在の市街における印象で推しはかつては誤りを犯すことになりかねない。

「雁」における散歩の距離感覚が、現代のそれとは異なるように、散歩によって結びつけられた高利貸の妾お玉と洋行する医科大学生岡田のあいだに存在する境涯のへだたりも、現代の感覚ではとらえにくいものになっている。

女中のお梅が無縁坂下の魚屋で「この内には高利貸の妾なんぞに売る看はないのだから」といわれたときいて、実業家というふれこみだった末造の職業をはじめ知ったお玉が受けたショックの大きさは「次第に湧いて来る涙が溢れさうになるので、袂からハンカチーフを出して押へた。胸の内には只悔やしい、悔やしいと云ふ叫びが聞える」(愁)と描かれているが、このことは金権万能の現代では理解しにくくなっているかもしれない。当時「高利貸は厭なもの、こはいもの、世間の人に嫌はれるもの」とされていた都合い

は、現在のサラリーマン金融などの比ではなかったはずである。

明治時代には高利貸は「氷菓子」との語呂合わせから「アイス」と呼ばれた。高利貸そのものは「烏金」といわれた江戸時代からあったから「アイス」ということばが生まれたのは、アイスクリームが一般世人の口にはいるようになった明治二十年代のことであろう。高利貸の「アイス」に「冷たい」という意味が利かせてあるという説は、高利貸イコール冷血漢という印象が当時はきわめて強かったことを物語っている。

主人公が高利貸になるベストセラー小説「金色夜叉」中編(明治三十年作)で、作者尾崎紅葉は金力の鬼と化した間買一に「九十円が元金、之に加へた二十七円は天引の三割、是が高利の定法です」と冷やかにいわせている。斎藤緑雨は「おぼえ帳」(明治三十年作)で「知合のもとに行きたる折、夏は馳走もなし、アイスクリームなりとも言はれたるにハタと憤りて、あなた嘲弄なすつてはいけません」というエピソードを記しているが、アイスといえは憎むべき高利貸しか連想できない人も多かったのであろう。

「秋葉の原に鉛細工の床店を出してゐる」(尊)鉛売の娘で高利貸の妾になったお玉の境涯に比して、洋行する医科大学の学生岡田が、いかにエリート的存在であったかは、すでに大学生の人数が百七十九万人にも達し、同じ年代では五人に一人が大学生という現代からはちょっと想像しにくい。明治十三年における大学在学者数はわずか二千六人にすぎなかった。当時は日本の総人口が現在の約三分の一にあたる三千六百六十五万人だった時代である。

明治八年に開成学校(東大の前身)に入り、卒業一年前の明治十四年

に中退した市島春城は『漫談明治初年』（昭和二年刊）所収の「開成学校の憶出」で、当時の大学生のエリートぶりを次のように回想している。「その時分の卒業生は、毎年幾人もなく、卒業すると間もなく、権小書記官位になると云ふ様に、重用された。破れ袴のひどい有様なのが、卒業さへすれば、あまり多くの年月を経ずに相当の地位を博し得た為に、飲食店などででももてたのである。銭のない時は『なあと其内参議になるとお前達をみんな養ってやる』と云つて、代金を払はずに品物をどしどし買入れて、負債を残したのもあった。その頃の大学生は、意気天に沖すると云ふ程の者で、中々秀才も出た。……」

東京医学校は明治九年十二月に、神田の和泉橋から本郷の新築校舎に移り、十年四月に開成学校と合併して東京大学となったが、十年十二月に医学部予備科に入学した入沢達吉が昭和三年に語った「明治十年以後の東大医学部回顧談」によると、当時の寄宿生のなかには卒業後の収入をあてにして放蕩する学生もいたという。

入沢は「近々卒業すればすぐ月給百二十円で地方の病院長になるといふので大した勢であった。その頃の百二十円といふものは大変な金である」と述べているが、明治十二、三年当時の寄宿舎の食費は一カ月二円、授業料は一カ月五十銭だったというから、卒業すればすぐに現在では想像もできないほどの高給取りになれたわけである。

入沢の回想には「その頃の本科生は皆大学の小使上りの岡田元助といふ医学士専門の高利貸で『糶』といふ綿名があった、その男から高利の金を、背負ひ切れないほど借金してをった」とあり「雁」の登場人物と同じ姓のこの岡田が未造のモデルではないかとされて

いるのである。

大学を卒業しただけでエリートになれた時代に、洋行という経歴が加わればエリート中のエリートといつてよい。海外旅行が容易になった近年ではかなり事情は変わってきているが、それでも海外留学の持つ意味はまだ失われていない。明治時代における洋行の重要性は、たとえば次のような指摘でも明らかである。「洋行という言葉は、異様な響きをもって、世人の魅力となっていた。洋行帰りということとは、新知識の代名詞として通用しておったが、全般に世の中に立身出世主義の旺盛になって来たのにつれて、そのための手づるの一つは、絶対に洋行であると考えられるようになった。……」（柳田國男編『明治文化史』風俗編）

世人の憎悪の対象となつている高利貸の妾と、世人の憧憬の対象となつている洋行をひかえた医科大学生のあいだに存するへだたりは、現代人の想像をはるかに越えるものであろう。お玉が育つたのは、江戸以来の旧習がまだ残る下町の世界であり、岡田が生活するのは、明治に始まる近代化をリードする山の手の世界であった。このへだたりも、現在では考えられない大ききだったといつてよい。その点で、お玉の妾宅が、山の手の本郷と下町の下谷を結ぶ無縁坂に置かれていることは、きわめて象徴的といえる。

こうした明治十三年当時の世相史的背景をふまえて「雁」に対するとき、散歩という新奇な風習のおかげで、偶然にも洋行する医科大学生岡田に近づくことのできた高利貸の妾お玉が、偶然によるもののごとくに再び引き離される悲劇の必然性を読みとることができるとはなからうか。